

「対話的な学びの中で自らの生き方を考える子どもの育成」

—道徳科の学習を中心とした取り組みを通して—

大阪市立加島小学校 高濱 康裕

## 1. 研究主題設定の理由

本校では昨年度研究主題を「楽しくコミュニケーションを図ることができる児童の育成～英語に対する興味関心を高めながら～」とし、外国語活動の学習についての取り組みを進めてきた。

成果としては、児童が英語にふれる機会を増やすことで、生活の中で自然と英語を使う児童が多くなった。また、Activityを中心とした学習課程を計画することで、児童が外国語活動で習得した言葉を使って楽しみながらコミュニケーションをとることができた。

しかしながら、ペアやグループでの交流活動のときに、ゲーム性を優先させてしまい、習得してほしい言葉や文法を使わず、互いに学習を深めることができないこともあった。

今日、教育現場では、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことが必要とされている。そこで今年度も、対話的な学びをさらに充実させるために、研究テーマを「対話的な学びの中で自らの生き方を考える子どもの育成」と設定した。

## 2. 研究の趣旨

今年度より、「特別の教科 道徳科」が実施されている。指導方法や評価方法の工夫を考えていくことが必要になり、道徳授業の在り方の転換期を迎えている。それにしたいがい、研究教科を道徳科とした。道徳科に焦点をあて、対話的な学びの中で、自分自身の道徳的価値の理解を深めたり、自己の生き方を見つめたりすることをめざす。

## 3. 研究の概要

対話的な学びの中で自らの生き方を考えられるような授業を行うために、研究の視点を設定した。

### 視点① 話し合い活動の定着

- 学年の実態に応じて、司会や考えを発表する人などの役割分担を決める。
- 人数を指定したり、話し合い活動の決まりを提示したりすることで話し合い活動の定形をつくる。
- 授業構成や発問内容等に合わせて、ペアやグループ、移動して交流する等の話し合い活動の形態を工夫する。

### 視点② 話し合い活動と書く活動との連動

- 自分の考えを明確にし、中心発問で書く活動と話し合い活動を連動させ、より自己の考えを深める。
- 児童が自分の考えをワークシートに記入する際、自分の意見は鉛筆、班の意見は赤、全体の意見は青というように、話し合い前後で色を変えて記述させ、思考の変容が一目でわかりやすいようにする。

### 視点③ 話し合い活動の充実

- 問題解決的な学習課程を取り入れ、目的意識をもって話し合い活動に参加できるようにする。
- 終末では、あらためて一人一人やクラスの課題に立ち返り、その課題を解決できるかを考えることで、児童が道徳的判断力や道徳的心情に留まらず、道徳の実践意欲や態度を育む。

### 視点④ 主体的な対話を促す発問の工夫

- 児童にとって新たな見方・考え方となる学びをねらいに設定し、発問構成を考える。特に中心発問はねらいとする道徳的価値を多面的・多角的に考えられるような発問を工夫する。

### 視点⑤ 掲示物の工夫

- 心情グラフや表情の絵、散布図を使ったり、板書を構造的に表したりする。

- 児童が状況を把握したり、想像したりする手助けとして、場面絵やパネルシアターを用いる。

#### 視点⑥ 役割演技・動作化の工夫

- 児童に登場人物の様子を動作化させ、登場人物の心情に気づきやすくさせる。
- 役割演技では、役柄の中で教師が意図的発問をすることで児童の思考を言語化させ、価値観を明確にさせる。

### 4. 研究の成果と今後の課題

#### (1) 研究の成果

##### ①授業モデルの構築

- 授業前にねらいとする道徳的価値についてアンケートをとり、導入時にその価値に対して発問することで、授業の中で考える道徳的価値を明確にすることができた。さらに、生活の中から見出した課題に関するめあてを授業の始めにたてることで、課題意識をもって話し合い活動に臨むことができた。
- 低学年では、児童に登場人物の様子を動作化させることで、身体感覚からもアプローチすることができ、登場人物の心情に共感することができた。役割演技では、役柄の中で、教師が意図的発問をすることで、児童の思考を言語化させ、価値観を明確にすることができた。掲示物も、挿絵を掲示するだけでなく、心情グラフや表情の絵を用いたり、板書を構造的に表したりすることで、登場人物の心情や児童の思考などを視覚的にとらえさせることができ、話し合いの焦点を明確にすることができた。さらに、教材文の状況を把握する手助けとして、パネルシアターや紙芝居を用いた。
- 発問の精選と工夫をすることができた。教材文に沿った登場人物の心情を問うだけではなく、登場人物の行動への自我関与ができるような発問の工夫ができた。

##### ②話し合い活動の充実

- それぞれの学年の実態に応じて、話し合いのルールを確立させることができた。
- 授業構成や発問内容等に合わせて、話し合い活動の形態を工夫することで、児童も安心して発表できたり、多様な考えに触れたりすることができた。
- 話し合い活動と書く活動を連動させることで、より活発で多様な考えを引き出す話し合い活動を進めることができた。

##### ③評価について

- ワークシートの中で、児童の思考の変容や、終末での自分自身とのかかわりの中で考えたことの記述を通して見取ることができた。加えて、学習の中での発言や教師とのコミュニケーションによる聞き取り等も併せて評価することで、より正確に児童の成長を見取ることができる。

#### (2) 今後の課題

- 道徳ノートやワークシートをもとに評価を行っていくが、考えを書くことが難しい児童には、適宜声かけをしていく。また、1時間ごとの評価だけでなく、学期や年間を通して、どのように考えを深めることができたのかを見取るような評価をしていく。
- 児童から出た多様な考えについて受け入れられるような学級の雰囲気づくりが重要である。多面的・多角的な考えを交流するためには、それを受け入れ、ちがいを認め合えるような学級経営をしていくことがさらなる考えの深まりを生み出すことになっていくと考える。
- 時間配分も含め、1時間の授業をどうデザインしていくかをさらに考えていく必要がある。教材の内容理解もそうだが、中心発問に対して自分の考えを書いたり、交流したりする時間も十分に確保していくことが大事である。
- 適宜補助発問をして授業をコーディネートしていくが、誘導にならないようにしていく。そのためには、事前準備や教員の個の指導力を高めていく必要がある。